



## 「牛飼いは楽しい」



肉用牛経営：

胎内市宮久 高橋 輝雄氏

早いもので、牛飼い三十年目、農業で生活をするしかありません。仲間と畜産団地で、牛飼いを始めたのが昭和五十三年の秋で、1年かけて五十頭ぐらゐまで導入しました。何も知らないで始めたので不安もありました。雌牛の導入から、やがて去勢牛に替えました。その当時、地域では雌牛の肥育が中心でしたが、売り上げを増やすには、去勢が良いとの指導があったので、仲間と取り組みました。販売の方法は、生体出荷で、長岡市場がほとんどでした。導入が一回転して、手ごたえを感じました。これなら一生の仕事になるかもしれない。しかし、牛飼いは、そんなに簡単なものではありませんでした。昭和五十八年から枝肉出荷に変わり、東京食肉市場へ出荷するようになりました。しかし、市場での評価は良くありませんでした。枝肉が小さく肉色も濃くバラは薄いものでした。他産地の枝肉とは、比較になりませんでした。帰りの電車は足も重く、酒やビールを飲んでも気分は晴れませんでした。また、牛の事故もあり、ガス腹や、尿石になったり、ある時は市場へ出荷した牛が、全部廃棄になったこともあり、大きなショックで、立ち直るのに半年かかりました。怖いもの知らずで始めたので、やれたと思います。今だったら、出来ないと思います。結婚して十五年目に、妻と二人で東京食肉市場へ行きました。一度は一緒に行ってみたくて思っていたので、とても良い思い出になりました。その時はどういう訳か良く売れて、二回目の新婚旅行のようでした。牛飼いは、家族が協力しないと出来ない仕事もあります。子供達もワラ集めの手伝いをしてくれました。両親には、東京食肉市場へ枝肉を見に行く時に助けてもらいました。自分の枝肉や産地の枝肉を見たりして少しでも良い物を作りたいと思い、年に五回ぐらゐは行きました。これからも楽しみながら、体力の続くかぎり牛を飼いたいと思う。

## 「就農4年目を迎えて」



養豚経営：

津南町小池 中島 正人氏

私は以前、スーパーの販売員として勤務していましたが、妻の実家での農業の話に興味を持ち、埼玉県から移住して来ました。当初は何も解らず驚きの連続でしたが、あっという間に三年の月日が過ぎ、四年目を迎えました。今でも解らない事ばかりですが、義父の指導の下、養豚、水稲、畑作と複合経営をしています。春から秋までは大変忙しく、仕事を教えてもらうというより見て覚えるという感じです。楽しい作業もあれば、辛い作業もありますが、その中で一番難しく、やりがいがあると私自身が思った仕事は「養豚」です。例えば、飲み水関係の器具や豚を入れる柵などが、豚が構って破損する時があります。あまり複雑な壊れ方だと私1人では直せないで頭にきますが、豚が壊してくれたので、私が修理の方法を覚えることができた前向きに考えています。また、種付けから出荷までの作業がスムーズに行かない時があります。受胎しない、産子数が少ない、餌の食いが悪い、子豚が下痢をした等ステージ別で様々な問題があります。それらには必ず原因があって解決策があると、家畜診療所の獣医さんが話してくれます。とにかく自分の判断でいろいろ試せて、それで駄目なら別の方法で解決に向かえばいいというような創意工夫ができることは、とてもやりがいがあると思うし、意欲も湧いてきます。

今後の私なりの目標としては、疾病を予防し、飼養環境を見直し、事故を減らして、一頭でも多く肉豚を生産して消費者の皆さんに安心して安全なおいしい豚肉を提供し、また、信頼を広げられる様に一生懸命に頑張ります。まだまだ、未熟者ですが、義父が安心して仕事を任せられる様、日々努力し、初心を忘れずに邁進するつもりでおります。